

# ネパール 夢の記

---第 10 次ネパール・ミカの会教育支援の旅---

2006.11.16 ~ 11.27



## 第十次の旅

齋藤 謹也

十年という区切りの年の旅。「あつという間」は実感ですが「十年間」というのは、またいままでの一回一回とは異なり、一つの大きな塊になったような重みがある教育支援の旅でした。

大谷安宏さんや和田泰子さんをはじめとした事務局の旅行準備は、ネパール側との通信の関係もあり、いつにもまして大変でした。そのご努力に対し、まず感謝したいと思います。

ヌルプ・ラマ氏には、カトマンドウ日本語学院の四十一周年記念式典があり、学院長として、全責任を負ったの開催で、さぞ準備に多忙に極めた事であつたでしょう。私達の旅行中にも、ラマさんにかかる携帯電話はひっきりなし、絶え間ない「指示待ち」は、式典終了も続きました。特に学院理事長が死去されたいま、ヌルプ・ラマ氏に寄せられる期待は大きくその役割がかなり過重なものとなるようです。

今回の式典に文部大臣が出席された事や、ネパール日本語教師会の会長就任予定となっていることなど、ますます多

忙をきわめていく事になるかと予感させられます。ヌルプ・ラマ氏の努力に謝しつつ、旅を続けました。

四十一周年記念式典やカトマンドウ日本語学院弁論大会などに出席した後、ナガルコットの深い朝霧をながめ、チャングナラヤンへのミニバイクも無事歩き通した一行でしたが、今回の旅のメインであつた創立十周年記念ルンビニ地区スポーツ大会（二十三日）の為にパイラワに着いた頃から、団員の方々の体調が崩れ始め、お粥を連日いただいたりしながら、何とか運動会を行う為に必死で頑張っている様子に、ただ頭の下がる思いでした。

式典準備の順調にすすみ、当日の八校（既援助校）連合運動会は圧巻でした。多分、この地方初となる運動会、玉入れや綱引き、そしてかけっこの三種目でしたが、だんだんと熱が入り、やはり対抗戦という事で、教員同士がエキサイトする場面もあり「大会運営」となると、初めての事だけに、難しさもありました。何とか無事終了した際、特に勝利した学校の喜び方は、なかなかのものがありませんでした。八割の成功と二割の今後の課題、地区の特殊性も表われたように私には思えました。特に、教員の質の向上（指導力）が、大きな今後の課題となるように思われたところです。

カトマンドウに戻ってからの JAPAN IN NEPAL・06の公演の鑑賞がありました。岡本有子さんの頑張りが強く印象に残りました。そして、ネパールにかける情熱の強さもひしひしと感じたところです。

ところで、今回十二日間の旅でしたが、日数が前より多い分、ゆつくりとできたように思えます。ただ、帰国後の仕事がまとまって襲ってきたように感ぜられ、やはり「還暦の人」。今までとは異なり、自身の体力のかけりがみえたように思えました。

旅行中「ミカの会」の活動者の高齢化の問題も度々話題となりましたが、十周年を終えた今、組織の強化、若返りも含めて考えていかなければならないと、わが身のかけりを省みながら思っているところです。

しかしながら、このミカの会十次に及ぶネパール行と、私自身の二十回近くの旅をふりかえる時、改めて道元禅師の言葉を思い出します。

「偏界の弥露は夢なり、この夢すなわち明々なる百草な

り」(夢中説夢)

この世のすべて現れているものは夢である。この夢とはすなわち、今明らかに見えている目の前の森羅万象なのですといわれます。ネパールでみている夢。次の代の方々につなぎながらまた形を変えながら、私自身もつ少し夢を見たいものと思っています。



## 第十次支援の旅 思いつくまに

青沼 義信

第十次支援の旅は、ラマさん校長の「カトマンドウ日本語学院四十一年記念行事」「日ネ国交五十周年記念行事」と、我が「ネパール・ミカの会創立十周年記念・ルンビニ地区支援校合同スポーツフェスティバル」など、今までに無く大きい行事の連続で緊張の連続でもありました。

頼りのラマさんは、学院記念行事の総括責任者としての行動の傍ら、日本から来た五十人以上の支援者への対応指示など、携帯電話の休まる暇も無いほどで、我々との打ち合わせもその合間を縫ってしなければならず、肝心のルンビニの様子も先生との電話連絡だけのようですので、全てをラマさんに頼るだけでなく、特にスポーツフェスティバルについては、現地に行つてその場での臨機応変の対応でやるうと大谷事務局長と話し合ったほどでした。

十七日カトマンドウに着いたときにはスリジャナさんの空港の中までの出迎え、空港出口には忙しい中ラマさん、モティさん、それに十一月初旬にネパール入りしていた和田さんの出迎えには恐縮してしまいました。

まず最初のイベント、カトマンドウ日本語学院の四十一年記念式典は、ラディソンホテルで来賓に文部大臣他関係者を迎え盛大に行われましたが、ネパールの人々の演説は長いので知られている上に通訳が入るので、中には十分近くを要した方も居りましたが、さすが我がラマさんは校長としての貫禄も充分、要点を簡潔に述べ好感を持てるものでした。

翌日の学院ホールで開かれた学院生弁論大会では、日本の詩の朗読、日本の昔話の朗読を各十二名、最後にネパールと日本との関係や日本への想いなどを生徒三名が流暢な日本語で発表しましたが、特に詩を読んだ若者が日本語を勉強してまだ数ヶ月と言つものには大変な驚きでした。

数年前、私がネパール語習得の授業を受けたにも拘らず、四ヶ月かかっても読むことも話すことも満足に出来ない上、若い生徒さんについて行けず、年齢のせいにしてあきらめてしまったことをフツと思いついた弁論大会でした。

そして短期間にこれだけ日本語をマスターできる学院の指導力に大きな驚きと感動を覚えました。

このような日本語学院を率いているラマ校長の何事にもきめ細かい心配りをされる気心の結果と納得しました。

ラマさんの心配りにはいつも触れていましたが、今回も二十日のチャンングナランまでのミニハイクでの昼食が「古都」の和式弁当であることに歓声を上げたこと。また、バイラワに入り体調不調者が出てきたときには、ホテルに滞在中の朝晩の食事にお粥の交渉され、その甲斐あつてスポーツフェスティバル当日は全員準備に参加でき、時間的に一部割愛したものの予定三種目を最後まで無事に役割を全うすることが出来たこと、これらはラマさんのきめ細かい心配りによるものと感謝の意を表したい。

支援の旅のメインイベント、ミカの会創立十周年記念式典・スポーツフェスティバルは二十三日予定通りシリ・ハジヤナ・エトラハ校グラウンドで行うことができました。式典後のスポーツフェスティバルは、玉入れ、綱引き、徒競走の三種目だけでしたが、各学校の意気込みの強さは八校推定千八百人の先生・生徒が来場したことでも頷けました。その上学校対抗となったので、勝利したときの喜びは大変なもので、特に競技が終わって総合優勝したアディアリ小学校が帰るときには、全員が両手を挙げ勝利の雄叫び？を上げながらバナナの門を出て行くのが非常に印象的でした。

スポーツフェスティバル、所謂運動会は、五十年前の高校時代が最後で、最近では孫の運動会の応援に行く程度で用具の準備はもとより設営にいたっては全く始めてのことです。何をどれだけ、何処で調達するかまつたくの白紙でしたが、加藤副理事長と大谷事務局長の中間調査での調査により、場所設定・設営機材・進行機材・競技機材・賞状・賞品・記念品の詳細リストを挙げてもらったことで、国内調達・ネパールでの調達に分類し手配することが出来ました。必要品調達の思い出の一部を思いつくままに紹介しましょう。

八月初旬、NHKTVで、ネパールでネパール在住の日本人が日本のラジオ体操からヒントを得て「ナマステ体操」なる体操を普及しようとしていると「ナマステ体操」が放映されたのを見、これをスポーツフェスティバルの最初に取り入れたらどうだろうと思ひ、ラマさんに調べてもらったが市販されていないようでラマさんも知らなかったようでした。そのため中間調査の際調べてもらいたいと大谷事務局長に依頼したところ、現地日本大使館でJICAからDVD・テープを取り寄せてくれ入手できました。

DVDで体操を見たのですが、ラジオ体操の三倍以上の長さで我々が短時間で覚えるのは不可能と判断、日本のラジオ体操だけでもやりたいと榎本さんにテープの手配と指導をお願いしましたが、その後「ナマステ体操」付属のテープ内容を全て聴いてみたところ、日本のラジオ体操第一がネパール語と日本語で入っており、これはシメタとネパール語の部分を使うことにし、当日榎本さんご夫妻の適切なリードも相まって、初めてにしてはなかなか見事なラジオ体操となり、「案ずるより生むが易し」とつくづく感じました。

学校別八色の色分けに布テープを探しましたが、布テープ八色はなかなか見つからず、もし見つかったとしても一校当り鉢巻だけでも六十四本、八校で五百十二本、学校別プラカードを入れるとかなりの費用になるため、試験的に百円シヨップの紙テープ（二巻入り百五円）を購入し丈夫さをテストすると充分使用に耐えるうえ、色も十色ありこれを採用したため一校あたり二百十円で済むことが出来ました。

そのほか徒競走の金・銀・銅のメダル（四）（個百五円）、ホイッスル（六個百五円）など百円シヨップも物によって

は利用価値があるものと改めて見直した次第です。

賞品のノート・鉛筆は競技参加者だけではなく、八校生徒全員にプレゼントが前提ですので、二千部は用意しなければなりません。ノートは現地製を使うことにしましたが、鉛筆は日本製に勝るものがないという現地からの要望もあり、橋本高校・淵野辺東小学校からの鉛筆だけではとても間に合う数字ではないので、苦慮の末、駄目元でトンボ鉛筆（株）に活動内容を話し安い鉛筆が無いだろうかと聞いたところたところ、一本五円（但し多少の印字のずれや傷があるもの）で三千〜三千二百本をとお話を受け、早速確約、三千本分一万五千元を振り込みましたが、三千二百本入りのケースが二個着き、誤配ではないかと問い合わせたところ「活動に役立ててもらったため余分に送らせて貰いました」とのこと、橋本高校・淵野辺東小学校から寄付を頂いた鉛筆とともに八小学校全員はもとより、二中学・一高校の生徒全員にも支給することが出来ました。

ボランティア用二十（黄）・教員用四十（緑）・会員用十五（青）のTシャツは、カトマンドウに入りホテルバイシヤリに着いて直ぐ、ホテル近くのシャツ屋さんでブツ・アイとネパール・ミカの会をネパール文字刺繍を条件に二

十日納期厳守、五十ルピープライスダウンで注文しました。二十日までの問店の前を通ると、めったに無い七十五着の注文に笑顔で作業に励んでいました。

小学校総合成績一位二位三位の賞状は加藤副理事長に創ってもらい、額入りで日本から持参したのですが、中学校二校用の賞状は、出発際に創ってもらったため額は間に合わず、カトマンドウで調達することにしました。カトマンドウに着いて早速、大谷さんと額探しに出掛けたのですが、売っているのは絵入りの額だけで、額だけを売っている店が無く、已む無くマンガラをはずしてもらい二個購入しました。しかし賞状を入れるには裏蓋を十二本の釘で止めているので、それを外してまた打ち付けねばならず、不便この上ないものでした。

記念品の掛け時計、賞品のノート、玉入れ用ドッコ籠、綱引き用ロープ、コースライン用石灰、三角旗用紙、校名ブラカード用ダンボールなどはバイラワで購入しましたが、中でもダンボール十五枚はなかなか集まらず店員が四、五回他の店へ走らされて、やっと入手できましたが、ラマさんが一緒にできなかったらこれら全てを調達することは出来なかつたとおつくづく感じ入ってしまいました。

第十次教育支援の旅のメインイベントである「ルンビニ地区スポーツフェスティバル」は、ルンビニ地区としては初めての運動会として企画通りの内容で進行し、競技では非常に盛り上がり、準備に係った者としては非常に嬉しく満足するものでしたが、これが教師、生徒、住民にどのような影響を与えたのか非常に気になるところで、いずれは少なくとも教師、生徒に運動会に対する反応を聞いてみたいと思います。

特に学校対抗による良い意味での競争に発展するのであれば喜ばしいのですが、部落同士の対抗意識がトラブルの元になったり、部落同士の付き合いが薄くなったりすることの不安を感じるのは考え過ぎでしょうか。

来年、ルンビニのどこかの学校から運動会の招待が来るようになることを楽しみにするとともに、その楽しさを未就学児童に教え、就学率向上に結びつけばこれに勝る喜びは無く、このときにこそ真に「スポーツフェスティバル」が大成功であったと言えると思っています。

事務局長を始めこの企画に積極的に協力いただいた会員の皆様、ネパールで孤軍奮闘されたラマさん、本当に有難うございました。

## ルンビニでの運動会

榎本 真幸・志保子

「ミカの会」教育支援の旅に同行をさせていただきました。支援十周年行事の「運動会」に焦点を当てて、報告をさせていただきます。

支援旅行の期間中、運動会を実施するために3日間が割り当てられました。現地での準備はヴァイラワの市内に宿をとり、そこですめられました。ヴァイラワは南に4キロほど行くとインド国境という場所に位置しています。ラマさんの話だと力車（人間が漕ぐ3輪自転車）で六十ルピも出せばインドまで往復ができる交易の町です。

十一月二十一日、ブツダ航空の十九人乗りピーチクラフト1900は、十時三十分にカトマンズを離陸しました。十一時二十分にヴァイラワの飛行場に着陸しました。窓から外を見ると飛行場内の滑走路のすぐ脇で、人の背丈もあるススキのような植物を刈っている人たちがいるのには驚きました。しかも、子どもも大人の周りにいるのです。

乗客が十九人なので、すぐスーツケースを持ってバスに乗り込むことができました。ホテルには二十分ほどで到着

しました。十二名の会員は、全員が体調不良を訴えていたため、昼食をそこそこにして、十四時頃、運動会の会場を視察するためホテルを出発しました。会場になるシリ・ヤナトラ八小中学校は、ホテルからバスで三十分ほどの所です。

バスはルンビニ公園へ向かう幹線道路の中間地点を斜めに折れてから、五分ほどで学校前に到着しました。幹線道路から学校までの道は、農道といった方がよく、両側は雑草が生え、所々に燃料にするのだという牛糞と糞を混ぜた固形物が整然と干してありました。道は、トラクターや水牛に引かせた牛車を通る以外、滅多にバスや乗用車を通らないでしょう、道路脇にできてバスを眺める人々に迎えられ学校に到着しました。

運動会の会場になる学校の周囲は、田圃に囲まれていて雑木林が東側にある自然豊かな所でした。我々の訪問を十数名の現地の方が迎えてくれました。明後日の運動会の相談をすでにしていたようです。教室は六棟あり雑草の生えた校庭を取り囲むように建っていました。この空き地に二千名の子どもたちが集まるということを聞かされ、収容できるのか心配が先に立つ広さでした。

しかも、徒競走で使う直線を斜めにしても、五十メートルがやつととれる面積です。周囲百五十メートル程の校庭の草は、子どもたちが良く遊ぶのでしょうか適度な長さになっていきます。ところがよく見るとレンガの破片や大きな石が草の間から覗いていて、小砂利がいたるところにあるため怪我の心配をしました。更に、紙吹雪を散らしたかのように二、三センチぐらいの紙片が無数に落ちています。

よく見ると飴の袋やノートの切れ端でした。公共の場とか、物を捨ててはいけないと言う公德心は、この国民には教育されていないようです。ですから、我々日本人が汚いという感覚をもって説明してもすぐに理解され是正されるものではなさそうです。そうはいつても運動会当日までにレンガの破片の片づけ、「紙吹雪」の収集、周囲の柵や入場門の設置等を依頼して引き上げることにした。

飴を一粒ずつ包んだ袋ですが、紙では無いために地中に戻らない代物です。ここでもネパールが抱える環境問題の一端を見ることが出来ました。ちなみに子どもたちは一ルピーで二粒の飴を買うことが出来るのだそうです。しかし、一粒八十銭であっても買えない子どもの方が多いのだそうです。子どもを学校へ送り出す理解ある親は、米、麦、野

菜を売って手にするわずかの現金を工面するのでしょうか。

この様な親を持った子供たちは、水で腹を膨らましてでも学校で学べる幸福感に浸っているのかもしれない。

二十二日は最終準備の日でした。ところが、昨晚の夕飯は全員がお粥という状態で、みんなが体調不良を訴える状態でした。この状態の中、理事長の齋藤さん、大谷さん、ラマさんの三人が現地との最終打ち合わせや物資の調達に出向きました。残留組で、記念品の数確認、ダンボール箱を使ったプラカードと色紙を三角に切った装飾旗の作成をしました。昼を食べる元気もなく、黙々と仕事をしました。おかげで、一時三十分頃には準備が終わり、紅茶とバナナで昼食を終えました。

二十三日当日です。準備万端整え九時三十分ホテル出発し、一路会場の学校に向かいました。十時五分前に到着しました。既に運動会を歓迎する旗が道路際に立てられ、入場門はバナナで作られています。校庭は見違えるように紙一つ落ちていません。

午後一時、八色のリボンに色分けされた子どもたちの入場でスポーツフェスティバルが始まりました。電気がない学校の庭に行進曲が鳴り響き、整然と十校の子どもたちが

入場しました。選手の宣誓も事前の指導が行き届いていて、感謝の言葉が丁寧に述べられました。

競技開始前に選手全員で準備体操をしました。ネパール語の説明で曲が日本のラジオ体操の第一がかかりました。先生の机に乗るのは躊躇しましたが、現地の子どもたちに見えないのでは混乱が起きることを心配して、真新しい机の上で体操をしました。私の真似をしていることが良く分かりました。机ですから上下の運動は控えめにしました。上半身と腕だけを動かすとそっくりそのままを真似するのです。必死になって見ている純真さがとても良く伝わってきました。

最初の競技は、学校対抗の玉入れでした。二、三年生の選手がエントリーする競技でしたが、どう見ても高学年という選手が混じっていました。二試合が終わったところで先生方からクレームがきました。同じ柱の籠に玉が多く入るのは、高さが同じではないのだからというものでした。比べた結果たくさん玉が入った籠の位置が逆に五センチほど高かったため、事なきを得ました。日本の一年生も自軍が勝った瞬間大喜びをしますが、勝った学校の子どもたちは勿論引率の教員まで全員が、体全体で喜びを表現するこ

とに十二名皆感動を覚えたのではと思いました。次は綱引きです。四、五年生が各校20名で綱を引き合うのですが、これは大変でした。人数がそろったかと思えば、男女の割合が違っていたり、生活年齢の違いが明らかだったりしたからです。校長先生方が協議して反則校と決定を下された学校もでるほど勝敗にこだわりました。このように出場選手の条件が問題で、一時運動会が中止されるかもという雰囲気になりました。しかし、校長の中からリーダーが現れマイクを握ると全体に指示を出して、継続することが出来ました。最後の徒競走は、組ごとの順位を付けることが出来、一番平穩に終わることが出来ました。

閉会式では一位から三位までに賞状が渡され、嬉しそうに校長先生の顔がとても印象的でした。集まった子どもたちは鉛筆やノートを高々と手にして、素直に嬉しさを表現していました。一時間以上延びた運動会も、何とか無事に終了したと思ったところで、もう一波乱が起きました。日本で借りて持参した万国旗や布製の旗が無くなっているのに気がつきました。気がついたときは遅くほとんどの旗が持ち去られた後でした。そして、開始時点で紙くずが一つも無かった校庭は、紙で作った旗の破片で元に戻ってしま

いました。破片を我々が拾うのを見て、ボランティアの高校生が拾い始めた光景は心が温かくなった瞬間でもありました。

ルンビニへ向かう幹線道路まで、真っ赤な大きな太陽を背にして歩いた会員の個々にやり遂げた充実感がありました。



## 初めての取り組みに感動した旅

大石 トキ

今年もラマさんはじめ、会員の皆様の格別なご配慮のもと、何とか支援の旅を終えられたことを、心からうれしく思います。その反面、体調を崩したり、その他でご心配をおかけし、支援の旅への参加もひげ時を迎えたことをしみじみ感じさせられました。

今回の支援の旅での三大自然事は、どれも初めての取り組みで、びつくりするやら、感激するやら、私にとりましては深く思い出に残る旅となりました。

まず、カトマンズ日本語学院の四十一周年記念式典また一連の行事は、ラマ校長を中心に先輩の方々、職員の方々、一致団結で見事にすめられ、今後ますますご発展されること、頼もしく感じました。

ミカの会十周年記念ルンビニ大運動会は、ルンビニというあのような所で運動会を試みよう、どなたが初めに考えたのか一番びつくりしましたが、さすがミカの会の面々たるや、どんなことでも即座に見事に適応される能力と体力には脱帽するばかりでした。初めての試みで大成功をお

さめたので、地元ではこれから何か新しい取り組みが始まるのではと、期待を持ちました。

また、日・ネ国交樹立五十周年のイベントの一環として、国立劇場で行われたジャパンインネパールの舞台では、盛り沢山の民族舞踊を一番良い席で堪能させていただきました。花束贈呈の大役まで仰せつかり恐縮いたしました。緊張で身が引き締まる思いをしたためか、その後体調がすっきりしたように感じました。

ミカの会の皆さま、連日お疲れでしょうに、夜までバザー用品を買い求めて、街の中を走り回るエネルギーにほとんど感心しました。それだからこそ、ミカの会はこれからも、まだまだ発展し続けることを確信いたしました。何も出来ない私ですが、このようなミカの会・この周年記念の支援の旅にご一緒できて幸せでした。これからも体の動くうちは、国内でのイベント等に参加させていただきたいと思っております。

ネパール・ミカの会のみますますのご活躍、ご発展を期待しております。

本当にありがとうございました。

## 初めてのスポーツフェスティバル

大谷 安宏

創立十周年を向かえ、総会以降慌しい日々が続いた。国内の記念式典も五月の理事会で今村副理事長を中心とした役割分担が決まると、式次第の検討、ラマ氏への招聘状発送、来賓の選定と案内状発送、記念品の検討手配、表彰者の選定、懇親会余興手配、支援データーや十年間の活動経緯資料作りと当日の役割分担など連日連夜の一致団結した関係者の尽力の結果、今年二度目の来日のラマ氏をはじめ多くの会員、来賓を向かえて、ミカの会らしい手作りの、和やかな式典を催すことが出来た。多くの来場者から評価の声に準備に携わった皆さんの笑顔と安堵した表情が印象的な立派な式典であったと喜び合いたい。

もう一つの現地での記念事業として、以前からルンビニでの運動会が提案されていたが、具体的な内容が纏まらなのまま、加藤さんとの中間調査で取り纏めることに託された。

今年がカトマンドウ日本語学院創立四十一周年記念式典

にあたり、当院の理事長の逝去に伴い、全責任を負い準備に多忙極めるラマ氏は日本からの同校関係者との対応を外し我々に同行してくれたことに申し訳なく思うと共に感謝の気持ちで一杯だった。

中間調査の主たる項目はルンビニ地区合同運動会の準備、タンセンでの図書合同贈呈式、ゲルワニマイ小学校四つ葉会図書館設計画立案、トリバン大学イラム校視察であったが、翌月に迫る合同運動会についての各校長への提案、調整にはラマ氏との協議を含めかなりの時間を要した。全支援校八校の校長と昼食を摂りながらの打合せを計画していたが、四校の校長がモスリムであり、ラマダン日に当るこの日は食事はもとより、水すら飲まない教義に合わせた厳しい打合せとなった。東京で何度か話し合われたルンビニ地区合同運動会の内容提案に満場一致の拍手で賛同を得たが、各校からの予測参加者二千名にのぼる参加者の同地区初の運動会の運営が果たして実施可能が大いに戸惑いも感じざるを得なかった。

地理的な配慮からシリ・ヤナトラ八校々庭を会場とし、幼児を含む一年生は参加対象から外す、学年別でなく年齢別の競技、言葉の通じない大会運営対応として教員の指導

の徹底とヤナトラ八校高校生のボランティア協力要請、各校生徒のバスによる搬送、機材の現地調達の可否など協議する項目は多岐にわたった。各校長そして会員の期待に添えてこの地区初の運動会の開催に漕ぎ着けるべく、会場での計測、レイアウトやらパイラフでの用具、機材の調達の可能性、宿泊先の手配などに奔走した。

中間調査から帰国して丁度1カ月後の支援の旅の出発まで準備に忙しい日が続いた。

中間調査報告と支援の旅説明会、四つ葉会図書館建設構想そして運動会も正式にルンビニ地区スポーツフェスティバルと決まり、式典、協議内容構想の提案と今までと違った支援の旅の準備が始まった。青沼さんが担当した航空券、バンコク宿泊先手配。スポーツフェスティバル用品の持参品と現地調達の区分け。物資の調達のしづらい現地の状況を考慮しながらの備品の準備、用具、賞品調達、加藤さんによる賞状の作成などの準備は出発前日まで続いた。

毎回のことながら支援の旅のスケジュールの確定はラマ氏との調整が充分にとれず難しい。

まして今回は日本語学院式典に奔走していることを考えると連絡も遠慮せざるを得ない状況だ。開催予定日も地区

校長集会と重複し日程の繰り上がりの可能性があり、再度ラマ氏がルンビニ入りしてスポーツフェスタ内容について詳細説明を行う予定も実施されていない。ルンビニでの宿泊先が一部未確認と懸念される項目は多いが「何とかなるさ」と割り切ったの現地入り。

空港出迎えのラマ氏に運動会開催日を確認すると

「文部大臣に校長集会の調整を依頼したが一任された」と不安顔。翌日に迫る41周年式典を考えるとそれどころではないのだろう。現地入りして予定通りに開催決行しようと割り切ることに。

カトマンドウでの教員、ボランティア会員用色別ロゴ入りTシャツ注文、賞状額の調達。

パイラフでの音響機器のリース、玉入り用籠、綱引きロープ、プラカード用ダンボール、トラック引きの石灰、

記念品の掛け時計、2000冊のノートの調達に奔走。

会場を視察し校庭のゴミ拾いから始まり、入場門、トラックのレイアウト。飾りの三角旗、学校別プラカード、ハチマキ作りと夜遅くまで体調不良を訴えながら準備作業がづいた。

運動会当日晴天。既にバナナの木の入場門が作られ、前

日高校生らが作業していた道路からの入口にはレンガを並べ整備されている。ごみ拾いから始まり、トラクターで運び込まれた五十本の竹竿による仕切り作り、生徒や会員手作りの三角旗、持参した万国旗の飾付け、中野さんの歩測による百mトラックライン引き、賞品、記念品の展示と会員より順調に準備が進む中、四台のバスにより各校から生徒が続々と集まり始め、指定の場所に付き皆一様にちよつと緊張顔。これだけの各校生徒が一同に集まったことがあったのだろうか？

この地区初めての合同運動会は和田さんの日本語とネパール語による開会宣言で始まった。ネパール語での宣言は彼等にとってミカの会により親しみを感じてくれたことと思う。娘の晴れ姿を見守るお母さんの満足そうな表情が印象的。昨夜ダンボールで作った各校ごとのプラカードを掲げ、行進曲に合わせて色別のハチマキ八校の選手団の入場行進、誘導に会員があちこち飛び回る姿はいかにも始めてのスポーツフェスタらしく微笑ましく感動的なシーン。理事長、校長代表挨拶に続き、マズワニ中学の尼さん姿の生徒代表挨拶は可愛らしく、高校生ボランティア代表は力強い。ラマさんの発声で復唱する選手等の選手宣誓に漸く選手らの

緊張がほぐれる。

中間調査時に日本大使館経由で入手したネパール語のラジオ体操第一のテープでの榎本先生指導の体操もなかなかの出来栄えだ。ラマ氏の解説で玉入れ、綱引きの会員による模範演技は女性軍の勝利で会場を盛り上げる。年齢別綱引きは真剣な競技に出場者の不正を訴えるなど揉め事に、一時はノーゲームも考えたが教員による話し合いで落ち着き、子供たちの競技参加の強い要望に沿って再開できた。メインの徒競走は真剣そのもの、細い足で兎に角速い。学校ごとの応援も実に賑やか。

仲間の勝利に飛び上がって喜び合う姿に、ここに開催出来たことに悦びと安堵感を感じた。得点順位は一位アディアリ校、二位シリ・シリ・ラム校、三位スンディー校に賞状が贈られ、各校に記念品の掛け時計と鉛筆、ノートの賞品を授与され閉会式となった。ルンビニの真つ赤な夕日がすっかり西に傾く中、今回三度目の校庭のごみ拾いに子供たちも集まってくる。今夜は法華ホテルの大風呂でゆつくりと疲れが癒せる。

今回スポーツフェスタを開催するにあたり、予測不能な事態の生じることの一抹の不安を持っていたが各校の教員

等の真剣な指導、ヤナトラ八高校ボランティア適切な対応、生徒たちの秩序ある態度そしてラマさんを始め会員の誠意ある熱心な行動により、どうにか計画通りに運営できたものと思う。

支援校全校一同に集まり、競技を通じてお互いを知合い、スポーツの楽しみを知り、共に喜びあう機会を提供できたことは会にとって大いに意義のあったことと思う。持参した万国旗のちぎり取られやルール違反に対する抗議による競技中断など残念に思うことも幾つかあった。

しかし生徒の目の前で不正に対して果敢に抗議する教師の姿勢は子供たちにとってマイナスマネジメントではなく、ルールを守ること必然性を教えた機会でもあったように思う。ごみのない校庭が習慣付けられ、合同のスポーツフェスタと言う文化が地域に定着するきっかけとなり、いつの日かミカの会に開催案内が送られてくることを期待したい。スポーツフェスタ後の各校の反応と子供たちの素直な感想を聴くことをラマ氏に依頼したい。準備にまた現地で頑張った会員の皆さん、日本から温かい支援を頂いた会員の皆さん。本当にご苦労さまでした。ありがとうございました。



## 頑張った！満足した！ネパールの旅

加藤 雅子

今年もあと残すところ一ヶ月を切ってしまった。大きな事故もなく家族皆、元気で過ごせたことが嬉しい。昨年は、精神的に不安定なときが多かったが、今年は明るく前向きな気持ちで過ごせたと思う。

ミカの会も今年は大きな節目の年だった。八月の「十周年式典」十一月の「ルンビニ地区スポーツフェスティバル」どちらも会としては初めての事なので、準備など実行委員会の方々も苦労は大変なものだったと思う。私も微力であるが、どちらにも参加することができて、私自身のボランティア活動に対しての気持ちがりセットされた気がする。

「教育支援の旅」への参加は三度目である。やはり三度目ともなるとカトマンドウの喧騒には驚かず、町田駅周辺も負けてはいないと思ってしまう。かえってカトマンドウの町並みや、いろいろな顔立ちの人々、そしてみやげ物売りのしつこさまで懐かしい気持ちで目に写った。自動車とバイク、特にバイクが以前より格段に多く、交通ルールもな

いような状態で走っているの、渋滞は常に起こり、のべつ幕無く鳴らすクラクションの音で頭が痛くなりそうだった。タメル地区を歩いていても狭い道をバイク、車がビーツと鳴らして走るのでゆっくり歩けたものではなかった。

今回の旅は、前半ラマさんが学校長を務めるカトマンドウ日本語学院の「創立四十一周年記念式典」や関連の行事に参加することに使われた。ラマさんはとても忙しそうだった。いつも身近で観ているラマさんをずっと離れた遠くから見ているようで、なにか不思議な感じがした。式典が行われたラディソンホテルはカトマンドウでもこんなにシャレた、明かりがまぶしく煌々としているホテルがあるのかとびっくりしてしまいました。バイシャリのうす暗い口ビーを見慣れているので……。

このホテルで昼食に食べたサンドイッチとフライドポテトがとてもおいしくて思い出に残っている。まあ、注文してから出てくるまでに相当の時間がかかり、腹ペコ状態だったということもあるが、コックさんが出てきて「おいしいですか？」と心配そうに聞きにきたのも印象的でした。「全部自分が作った」と自慢げに言っていた。

式典、その後の会食パーティーなどすべてネパールタイムで行われ「ビスタリ！ビスタリ！」とおもいながらも待っている時間の多さの中で、身体にどんどん疲れが溜まっていくのを感じた。そして、やっとルンビニに向かうというその日の早朝より私のお腹はおかしくなってしまう。あのようなお腹の状態は初めて、やはりネパール恐るべしと思いついた。しかし、今村副理事長が持たせてくれた薬のおかげですっかり元気になり本番を迎えることができた。

運動会当日、ヤナトラ八校庭に到着したときの嬉しさと驚きは忘れられない。いたる所に落ちていた紙くず、ビニール等のゴミがすっかりきれいに拾われ、校庭は竹とビニールテープで仕切られた生徒席と競技場ができ、立派な運動会の会場となっていた。

ミカの会が用意した黄色のTシャツを着た高校生ボランティアの自信にあふれた表情とテキパキとした働きに助けられ、順調に準備され、進行がされていった。

途中スンディ小学校の校長の激しい抗議に呆気にとられ、運動会がこれで中止になってしまうのかと思っただが、なんとか最後の徒競走まで行うことができた。いろいろ問題もあつたのだけれど、今思い出すのはすべて良いことばかり。

行く前に心配していた多くの人が集まり収拾がつかなくなり、パニックになるのでは、ということもなく、きちんと子供たちは席についていたし、入場行進も整然と出来ていた。ラマさんの事前の説明が先生や、子供たちにしっかりと伝わり、理解されていたのだと思う。本当に私はこの運動会の場にいる事が出来て嬉しかった。

ルンビニから戻ってのカトマンドウの町はずっきり晴れ渡り、空も澄んでいて、町中から遠くヒマラヤの山並みを見ることが出来た。ぼーっと浮かんでいるように見える山々に歓声を上げているのは我々だけであった。

帰国当日はラマさんの計らいで空港に向かう途中、カトマンドウ南部のヒマラヤの山々が綺麗に見える田園地帯に寄った。私としては三度目のネパールで初めて肉眼できちりとすばらしい景色を見ることが出来た。そして、さらにラマさんは飛行機の座席をヒマラヤの山が見えるようにと左側の席を用意してくれたので、最後の最後まで頑張ったご褒美のように、雄大な景色をプレゼントしてくれたのだ。

ミカの会の理事長さんはじめ皆さんの温かい気遣いあり  
がとっございました。  
また新しい気持ちでネパールの子供達の笑顔を見に行き  
たいと思っています。



## 頑張った！満足した！ネパールの旅

加藤 雅子

今年もあと残すところ一ヶ月を切ってしまった。大きな事故もなく家族皆、元気で過ごせたことが嬉しい。昨年は、精神的に不安定なときが多かったが、今年は明るく前向きな気持ちで過ごせたと思う。

ミカの会も今年は大きな節目の年だった。八月の「十周年式典」十一月の「ルンビニ地区スポーツフェスティバル」どちらも会としては初めての事なので、準備など実行委員会の方々も苦労は大変なものだったと思う。私も微力であるが、どちらにも参加することができて、私自身のボランティア活動に対しての気持ちがりセットされた気がする。

「教育支援の旅」への参加は三度目である。やはり三度目ともなるとカトマンドウの喧騒には驚かず、町田駅周辺も負けてはいないと思ってしまう。かえってカトマンドウの町並みや、いろいろな顔立ちの人々、そしてみやげ物売りのしつこさまで懐かしい気持ちで目に写った。自動車とバイク、特にバイクが以前より格段に多く、交通ルールもな

いような状態で走っているの、渋滞は常に起こり、のべつ幕無く鳴らすクラクションの音で頭が痛くなりそうだった。タメル地区を歩いていても狭い道をバイク、車がビーツと鳴らして走るのでゆっくり歩けたものではなかった。

今回の旅は、前半ラマさんが学校長を務めるカトマンドウ日本語学院の「創立四十一周年記念式典」や関連の行事に参加することに使われた。ラマさんはとても忙しそうだった。いつも身近で観ているラマさんをずっと離れた遠くから見ているようで、なにか不思議な感じがした。式典が行われたラディソンホテルはカトマンドウでもこんなにシャレた、明かりがまぶしく煌々としているホテルがあるのかとびっくりしてしまいました。バイシャリのうす暗い口ビーを見慣れているので……。

このホテルで昼食に食べたサンドイッチとフライドポテトがとてもおいしくて思い出に残っている。まあ、注文してから出てくるまでに相当の時間がかかり、腹ペコ状態だったということもあるが、コックさんが出てきて「おいしいですか？」と心配そうに聞きにきたのも印象的でした。「全部自分が作った」と自慢げに言っていた。

式典、その後の会食パーティーなどすべてネパールタイムで行われ「ビスタリ！ビスタリ！」とおもいながらも待っている時間の多さの中で、身体にどんどん疲れが溜まっていくのを感じた。そして、やっとルンビニに向かうというその日の早朝より私のお腹はおかしくなってしまう。あのようなお腹の状態は初めて、やはりネパール恐るべしと思いついた。しかし、今村副理事長が持たせてくれた薬のおかげですっかり元気になり本番を迎えることができた。

運動会当日、ヤナトラ八校庭に到着したときの嬉しさと驚きは忘れられない。いたる所に落ちていた紙くず、ビニール等のゴミがすっかりきれいに拾われ、校庭は竹とビニールテープで仕切られた生徒席と競技場ができ、立派な運動会の会場となっていた。

ミカの会が用意した黄色のTシャツを着た高校生ボランティアの自信にあふれた表情とテキパキとした働きに助けられ、順調に準備され、進行がされていった。

途中スンディ小学校の校長の激しい抗議に呆気にとられ、運動会がこれで中止になってしまうのかと思っただが、なんとか最後の徒競走まで行うことができた。いろいろ問題もあつたのだろうが、今思い出すのはすべて良いことばかり。

行く前に心配していた多くの人が集まり収拾がつかなくなり、パニックになるのでは、ということもなく、きちんと子供たちは席についていたし、入場行進も整然と出来ていた。ラマさんの事前の説明が先生や、子供たちにしっかりと伝わり、理解されていたのだと思う。本当に私はこの運動会の場にいる事が出来て嬉しかった。

ルンビニから戻ってのカトマンドウの町はずっきり晴れ渡り、空も澄んでいて、町中から遠くヒマラヤの山並みを見ることが出来た。ぼーっと浮かんでいるように見える山々に歓声を上げているのは我々だけであった。

帰国当日はラマさんの計らいで空港に向かう途中、カトマンドウ南部のヒマラヤの山々が綺麗に見える田園地帯に寄った。私としては三度目のネパールで初めて肉眼できちりとすばらしい景色を見ることが出来た。そして、さらにラマさんは飛行機の座席をヒマラヤの山が見えるようにと左側の席を用意してくれたので、最後の最後まで頑張ったご褒美のように、雄大な景色をプレゼントしてくれたのだ。

ミカの会の理事長さんはじめ皆さんの温かい気遣いあり  
がとっございました。  
また新しい気持ちでネパールの子供達の笑顔を見に行き  
たいと思っています。



## ネパールの旅

中野 千恵子

今年のネパールの旅はミカの会十周年の記念の運動会を行なう旅行となった。

私は二十四年働いていた仕事を前日でやめ、晴れ晴れとした気分で、参加しました。

当日、迎えの車に乗り、京王八王子駅へ、まだ暗く、とても寒い。バスに乗ってから、朝食の消化不良になり、お腹は痛いし、気分もすぐれない。これからの旅が心配だ。お腹も、胃もスッキリしたところで成田空港に八時前に到着。九時集合まで時間があるので、ドルに換金したり時間を過した。その内、大石さん、町田組が到着。全員が揃いネパールへ出発。

カトマンドウ空港では、ラマさん、モテイさん、スリジヤナさん、先にネパール入りしてた和田さんが迎えてくれた。モテイさんとバスでバイシャリへ。休憩後、民芸品の買い物へ出発。まず、運動会に着るＴシャツを注文。学生ボランティア黄色 二十着、先生の緑色 四十着、ミカの会の青色 十五着 全部で七十五着を二十日夕方までの希

望で注文。とても、嬉しそう。なんせホテルの側なので、店の前を通るたびに手をふり挨拶。

タメル地区の民芸品は以前と違いなかなか安くしない。交渉が難しい。

夕食はサムンドラの演奏を聴きながらの食事。

翌日十八日は朝 モテイさんとスワヤンプナート見学。相変わらず物乞いが多い。見ているのが辛い。

午後はカトマンドウ日本語学院四十一周年記念式典に参加。昼食は式典が行われるラディソンホテルで、サンドイツチ、ポテト、鳥のから揚げ等。食べていると、コックさんが様子を見に来た。「とても美味しい」を伝えると自慢そうに喜んでいた。

式典は広間で行われた。私達は来賓の立場のようだ。学院院长ラマさん、草の根校舎の会の世話人、文部大臣等の挨拶。ネパール音楽、日本の歌、踊りがあり終了。

その後、簡単な食事、懇親会。ガーデンパーティは少し寒く、火が恋しい。

十九日は日本語学院の弁論大会に参加。詩、物語、自分の考えなど日本語で話をするのです。優勝者は私達と一緒にナガルコットの一泊旅行に参加。カトマンドウに住んで

いても行つた事がないそうです。でも、残念ながら、ナガ  
ルコトからは、ヒマラヤの山々は見られませんでした。

翌日は菜の花やサクラの花をバスの中から観賞。途中で  
バスを降りチャングナラン迄、ミニバイクです。最初は  
少し登り道。私達は運動靴ですが、スリジヤナさん達は、  
サンダル履きでスタスタ。見晴らしの良い木々の中で、古  
都のお弁当を頂きました。ラマさんの心配りには頭が下が  
ります。その後もビスタリーバイク。やがて、世界遺産の  
古い寺チャンナラン寺院に着きました。十ルピーに乗っ  
ている神様もあります。

バスでカトマンドウに戻つてから、夕食は桃太郎で、ラ  
ーメン、餃子を戴きました。

二十一日はイヨイヨ運動会の為にバイラワ迄、空の旅で  
す。やっと、雪山のヒマラヤを見ることが出来ました。ば  
んざい。

バイラワでは、運動会が行われる予定のヤナトラ八校校  
庭見学。新しい校舎が出来ているのとゴミの多さに驚きま  
す。入場門、退場門、トラックの位置の決定をし、ホテル  
ナラバナへ。

夕方、運動会に使う物資購入。時計、玉いれの籠、綱引き  
の綱、プラカードのダンボール等。日本ではいらぬダン  
ボールも捜すのに一苦労。

二十二日は運動会の準備。私は昨晩から調子が悪く、余  
り手伝えなく、ゴメンナサイ。明日がとて心配。

二十三日 運動会（スポーツフェスティバル）お天気もよ  
く、皆、身体はいまいちだけど、気力はオーケーのよう  
です。ヤナトラ八校に着くと、ビックリです。校庭は綺麗に  
清掃され、バナナの木で入場門、退場門が出来ているので  
す。

高校生のボランティアに黄色のＴシャツを渡すと、すぐ  
誇らしげに着ました。そして、飾りつけなど、好く手伝っ  
てくれました。

開会式の後、ラジオ体操です。ネパール語の解説と私達  
の体操を見よう見まねで行いました。テニスボールでの玉  
入れも私達が見本。各 学校二十人ずつで戦いです。

皆、エキサイトし勝ったところは大変な喜びようです。あ  
ちこちに散らばったボールをボランティアは集めたり、観  
客もグラウンドに戻したり、マナーも少しはよくなった感じ  
がしました。

次は綱引き。これも、二十人ずつですが、やはり、多い人数だったり、玉入れと同じ子供が出てきたとのクレームがあったりで、一時は中止かなと思いましたが、子供たちが続けたいとの希望があり、続行しました。

次のゲームは徒競走。細い足で早いこと。また、ゴールのテープを飛び越えてしまうのです。これには驚きです。表彰式も無事に終え、かたづけ返しましたが、綺麗だった校庭はお菓子の紙や、旗の紙で散らかっています。まだ、ルールは身についていないのだと感じました。

今年のメインイベントの運動会も終わり、ほっとしました。カトマンドウに戻り、パドマカニア校にパソコンと傘のプレゼント、JAPAN IN NEPAL の観賞など、全行程が無事終了し、タイ経由で日本に戻ってきました。

タイでは十一月二十六日 私の誕生日。昨年につき、ケーキを戴いてしまいました。時間がなかったので、ゆっくり味わうことが出来なかったのですが、皆さんの心配りには、頭が下がります。有難うございました。

そして、ルンビニで初めての運動会を行い成功したこと。行動力にも感無量の旅でした。



## 十周年支援の旅

浜崎 ヤスエ

支援の旅から帰って数日がたった。遠い日のことのように思えるのに、床について目を閉じるとまだネパールで浮遊している自分がいる。

今年はいかの会十周年。カトマンドウ日本語学院創立四十一周年。日ネ国交樹立五十周年と三つの周年事業が重なった。

まず、ラマさんの招待で、日本語学院の記念式典とパーティーに出席。ラディソンホテルの立派な会場で、文部大臣を迎えての重みのある式典が行われた。そこにはミカの会のラマさんとは別の貴族あるヌルブラマ校長の姿があって、その多忙ぶりも知ることになる。

翌日は日本語学院の弁論大会。詩、朗読、弁論と、短期間で学んだという学生達の懸命さが伝わってきた。学院の先生方の日本語の上手さにも感心させられた。

ミカの会十周年記念のぶっつけ本番の運動会は、ヤナトラ八校で、千四百から千五百名の生徒を集めて行われた。

支援校の八校がプラカードを掲げて入場、整列したときは胸があつくなった。

「ミカの会が建ててくれた校舎のおかげで雨の日も教室で勉強することが出来ます」生徒代表の挨拶の言葉をうれしく聞く。

ラジオ体操、玉入れ、徒競走、トラブルはあったが、子供たちは一生懸命で、勝ち組の喚声と拍手で盛り上がった。今まで見たことがないルンビニの元気な子供たちだった。十周年記念事業として本当に良い運動会だったと思う。

ここに至るまで、大谷事務局はじめ係って下さった役員の皆様の大変なご苦勞に感謝するのみです。バザー用品の買い物も役に立てなくて、和田さん、中野さん、加藤さんに負担をかけてしまった。

運動会前日はほぼ全員が食あたりでダウンしたが、何とか切り抜けて頑張った。そのお陰か帰国の日にはヒマラヤの山が見え、機上からはエベレストも見ることができた。

ラマさんからネパール内戦終結のニュースを聞く。増えつづける車とバイク、人でカトマンドウの街中はますますごったがえすことだろう。

## 2006年ネパール初の運動会と私と反 省

山下 繁憲

十一月十六日八王子を朝六時成田行きバスで出発。

約二時間ぐらいで成田に町田の人達と合流し全員で十名元  
気一ぱいで出発。バンコクで一泊。十七日ネパールの首都  
カトマンドウに着く。空港にはラマ君がいつもの笑顔で迎  
えに来ていた。

車のクラクションの音、埃っぽい町は相変わらずだ。  
日本語学院四十一周年記念のパーティー、弁論大会も終わ  
り、カトマンドウに三泊した。

カトマンドウからナガルコットに。この日もヒマラヤの  
山々を見ることが出来ない残念。

ナガルコットからチャングナラン(寺)までミニハイキン  
グをしました。途中段々畑にピンクのそばの花が咲いてい  
てきれいだった。のんびり山を眺めながらランチを食べた  
りのんびりした一日だった。二十一日空路パイラワに。

ミカの会十周年記念連合大運動会の準備。町で機材を調  
達。二十一日夜体調をこわしてしまい、お手伝いが出来な  
くて残念。体力では皆さんの分まで頑張るつもりだったの  
に、二十二日になっても回復しない。ピオフェルミン、正  
露丸まったく効果が無い。皆さんが準備で忙しいのに役に  
立てなくて気持ちばかりあせる。

一番忙しい時にホテルで休んでいる。今村先生の薬を三  
個いただき二十三日の運動会にはなんとか参加することが  
出来ました。

グランドがきれいになって子供たちが大勢集まっていた。  
ミカの会の人達は紫、ボランティアの高校生は黄、先生方  
はグリーン。カトマンドウで用意してきたお揃いのTシャ  
ツを着て運動会に参加。玉入れ、綱引き、徒競走。皆楽し  
そうに一生涯懸命頑張りました。表彰式、記念品、参加賞そ  
して齋藤理事長さんの挨拶で大運動会も無事終わりました。  
今回の旅では会員の皆様には大変迷惑をお掛けしてしまい、  
自分なりに反省をしました。

一章 ゴザインクンド

登る、登る、登る。

ランタン・リルンにタッチできた。

そこには弟の足跡がある。また登る。

空からの光をつけ、きらきらとやさしいさざ波で

迎えてくれた、最初の湖サラスワティクンド。

ブルーグリーンの液体で満たされた器のように

静かに存在するバイラブクンド。

太陽の光をはね返し、山々の影を吸い込んで

とうとうと水を湛えたゴザインクンド。

百八もの湖が点在するという。

四三〇〇メートルの高みに

誰がこんな大きな湖を創ったのか。

水の中でおぼれる魚もいるのだろうか？

私は空気の中でおぼれていた。

二章 ひより

小さなホテルの屋上で、飛び立った飛行機を見送った。

そして、ひとりになった。

夜、自分を励ましてサムンドラの演奏を聴きに出かけた。

ダルバートタルカリを食べながら、ひとり小さな拍手を送

る。

食べている人々はいいても、聴いている人はいなかった。

朝日を右頬に受けながら、友の描いてくれた地図を片手に

友を訪ねた。心地良い緊張感。

ボーディングスクールで日本語を教えている友は

たくましくネパールにとけ込んでいた。

今日は朝日を背に、スワヤンプナートまで歩いた。

山道から見上げるスワヤンプーの気高いこと。

三百六十五段の上から慈悲ある目玉が見下ろしている。

満たされた心で西日に向かって帰る。

### 三章　いとおしき存在

トリブヴァン空港でミカの会を出迎えた。

母の元氣そうな顔があった。

みなさま、お世話になりました。

日本語学院四十一周年式典が盛大に和やかに行われた。

そのすべてを陣頭指揮する、ヌルプ・ラマ氏。

ネパールの将来を背負って立つ、すばらしい青年の姿。

世界遺産チャングナラン寺院までのハイキング。

あと数ヶ月で杳寿を迎える母にとっては

遠い遠い道のりだった。

ずっとつないでいた母の手は冷たかった。

仕事の合間をぬって、二回も会いに来てくれたアヌ。

タンセンで出会ったとき十七才だった彼女は

今、カトマンドウで先生になっている。

四人の娘を懸命に育てているサラダ。

私の娘と同じ歳くらいかも・今年も会えた。

ミカの会十周年記念ルンビニススポーツフェスティバル。  
玉入れ、綱引き、徒競走、どれも初めてのこと。

競い勝つ喜びを知った子どもたち。

荒い息でテープを飛び越え、ゴールしてくる少女たち。

背中をさすると、手のひらに骨がふれた。

自分の体調の悪さを、一旦どこかに預けて

持ち場、持ち場で頑張ったミカの会の仲間そして私。

以前「頑張るは、我を張るから来た言葉よ。」の

一言を聞いて、使いづらくなった言葉「頑張る」。

でも、我を張らなくては、何も進まない時もあるのよね。

すべての大切な存在に

いっぱい、いっぱいありがとう。



## ネパール・ミカの会



### ネパール夢の記 第10号

NPO 法人ネパール・ミカの会教育支援の旅

発行日：2006年12月28日

発行所：東京都町田市忠生2-5-36 こもれび堂内

NPO 法人ネパール・ミカの会

電話：042-797-3675

ホームページ：[www.nepal-mika.jp](http://www.nepal-mika.jp)